

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 7 年 2 月 25 日

氏名 小沼 聡恵

所属 教職開発 コース

指導教員名 浅井 幸子 教授

1. 研究課題 民間教育研究団体における教師の学びの様相—歴史教育者協議会の教師のライフヒストリーを事例として—
2. 報告する学術活動の実施期間 令和 7 年 2 月 16 日 ~ 令和 7 年 2 月 21 日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑧
<p>プログラム名：グローバル・リーダー育成、欧州研修プログラム</p> <p>派遣先機関：パリ国際都市大学、UNESCO、OECD、ストックホルム大学</p> <p>国・都市名：フランス・パリ、スウェーデン・ストックホルム</p> <p>派遣期間：2025年2月14日～2025年2月23日</p> <p>プログラム概要：</p> <p>本プログラムでは「Education for Sustainable Societies in a Changing World」について学生たちの理解を深めることを目的としている。プログラム期間中、パリ（フランス）では、パリ国際大学都市、経済協力開発機構（OECD）、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）を訪問し、職員と交流した。ストックホルム（スウェーデン）では、国際シンポジウムでの発表、ストックホルム大学教育学部の学生たちとの研究交流、現地の学校訪問を行った。</p> <p>研究発表内容等の概要：</p> <p>スウェーデンの国際シンポジウムで研究発表を行った。本研究の目的は、日本の教師の協働的な学びの場の一つである歴史教育者協議会の北海道支部（以下、北海道歴教協）において、教師がアイヌ問題に取り組む授業をどのように行ってきたかを、ライフヒストリーを通して明らかにすることである。分析の結果、教師は被教育経験と教職経験を通じて信念を確立しており、その信念が、長い教職生活においてアイヌの歴史研究、教材研究を継続する基盤となっていることが明らかとなった。また、信念に基づく教育観を共有できる場が北海道歴教協であり、北海道歴教協で学んだことも授業づくりにつながっていることが明らかとなった。本研究は、現在においても残存する日本社会の差別問題に教師がどのように取り組んでいるかを再考するとともに、現在の教師の力量形成を支えるコミュニティを再考することに役立つ点で意義がある。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本プログラムでは、パリの国際機関訪問とストックホルム大学の国際シンポジウムにおける研究発表を行った。国際機関訪問では、国際機関で働く日本人のキャリアを知り、自身のキャリアプランを見つめる機会となった。また、今後世界で求められる学力観や教育観について国際機関の職員と意見交流を行った。国際シンポジウムで行った発表内容は、代表的な民間教育研究団体（以下、民間研）の一つである歴史教育者協議会（以下、歴教協）の教師の学びと成長に着目して分析した研究である。分析対象はアイヌ実践に取り組む北海道歴教協の教師である。分析の結果、教師は被教育経験と教職経験をもとに、アイヌへの差別に共感していることと、次世代を担う生徒たちにアイヌの歴史を伝えなければならないという使命感を確立していることが明らかとなった。また、その信念を基盤に、アイヌの歴史を探究し続けていることと、生徒たちがアイヌの歴史を我が事として考えられるように、地域教材を用いる授業を継続してデザインし続けていることが明らかとなった。さらに、アイヌ実践を行う教師の信念を支える場が北海道歴教協であり、北海道歴教協で学んだことを教師が授業実践に活かしていることも明らかとなった。この結果から、北海道歴教協は教師の信念、学び、成長を支える場であるといえる。当日の質疑応答においては、博論における本研究の位置づけに関する質問を得たうえで、研究を発展させるために信念と成長の研究のみならず、教師のエージェンシーの研究にも着目した方が良いというアドバイスをいただき、充実した議論となった。